

学級規模等と教育効果に関するこれまでの研究について

・学級規模に関する研究(欧米)

1 グラスとスミスの研究(いわゆるグラス=スミス曲線;1982年)

- ・ 学級規模が20人程度以下になると学習効果が大
- ・ 児童生徒の感情的な側面への効果, 教員に対する効果, 教授課程への効果は, いずれも小規模学級の方が効果大

2 米国連邦教育局の公表「学級規模と政策;政治と特効薬」(1988年)

- ・ 学級規模縮小という経費のかかる政策は, 投資の割には学習達成度の向上に繋がらない
- ・ 非効率な方法に投資するより教授法改善や教員の力量向上に資金を投入すべき

3 英国勅任視学官事務局の公表「学級規模と教育の質」(1995年)

- ・ 学級規模と教授・学習の質との間に単純な繋がりはない
- ・ 小学校低学年では学級規模縮小は有効(大規模学級への移行後も有効)
- ・ 学習に関しては, 学級規模よりも指導方法や学習集団形成の影響が大 等

4 米国テネシー州の実験(就学前~第3学年;1985年~)

- ・ 小規模学級(13 - 17人)は通常学級(22 - 26人)より優れた成績をあげた
- ・ 学校経験の初期に小規模学級を経験した者に効果が持続する 等

5 米国連邦教育局の公表「学級規模縮小;何が分かっているか?」(1998年)

- ・ 低学年で学級規模縮小は有効。特に15人~20人規模で顕著
- ・ 学級の少人数化には強力な予算的裏付けが必要であり、教員採用にも大きな影響を与える 等

6 英国学校制度の準備学年における学級規模に関する調査研究(2002年)

- ・ 読み書きと計算テスト結果は、学級規模の増大とともに低下した 等

学級規模に関する研究(日本)

1 昭和30年代に広島大学,九州大学,名古屋大学において,少人数学級の方が有利との報告

2 上智大学加藤幸次氏の研究(平成2年)

- ・ 学力テストの結果,有意差があるのは一部教科(体育,理科)のみ
- ・ 児童生徒アンケートの結果,個別指導,学習環境は学級規模が小さい方がいいが,児童生徒の授業への意欲・興味,理解度,授業態度は殆ど差はない
- ・ 授業観察の結果,少人数学級では一人学習の機会が多いが,児童生徒相互の活動等は少ない

3 国立教育研究所内チーム・ティーチング研究調査委員会(代表:高浦勝義)による研究(平成11年)

- ・ 学力テストの結果,「T.T」の方が「1人教師による学級一斉授業」より成績向上に効果があることが認められた
- ・ さらに,「T.T」の中でも,学級を解体し,学年T.Tによる方が効果のあることが認められた

4 学級編制及び教職員配置等に関する調査研究報告(代表:高浦勝義)による研究(平成13年)

- ・ 学級規模間の有意差は見られないが,20人以下の学級が他の規模よりも比較的に高得点を示している

5 指導方法の工夫改善による教育効果に関する比較調査研究(代表:高浦勝義)(平成16年)

- ・ 算数(数学)、英語という限られた教科・単元ではあるが、概して少人数指導が学力等の形成にとって効果的であることが認められる。
- ・ 学級規模の縮小は指導方法の改善を伴ってこそ効果があがるものと考えられる。

学習集団の規模に関する研究

香川大学教育学部附属坂出中学校における研究(平成3年)において、40人 30人 20人と学習集団の規模が小さくなるにつれて学習環境・指導方法への影響度とも向上という結果

学校規模に関する研究

国民教育研究所(日教組のシンクタンク)における研究(昭和59年)において、調査結果をもとに適正規模は小学校で18学級以下、中学校で15学級以下を目標にすべきとの提言

意識調査

1 全国教育研究所連盟の教員の意識調査(昭和45年)では、小・中学校とも21人～35人の範囲を適正とする教員が8割以上

2 東京都立教育研究所の教員の意識調査(平成3年)

- ・ 一斉指導に適切な規模については、30人以下学級と答えた者が概ね8割以上
- ・ 個別指導に適切な規模については、25人以下学級と答えた者が概ね8割以上
- ・ 学級経営に適切な規模については、30人以下学級と答えた者が概ね7割以上

3 日本教育学会の「学校・学級の編制に関する研究委員会」を中心とした研究グループによる教員の意識調査(「学校・学級の適正編制に関する総合的研究」第2次中間報告書;平成11年)

- ・ 管理職は、教育の諸課題解決に当たって「学級規模の縮小」が必要であることを強調
- ・ 小学校教員の意識調査では、学級規模の縮小により教育効果が高まるが、固定的な学習集団での一斉指導では限界があり、教科等に応じた柔軟な学習集団の編成が必要
- ・ 中学校教員の意識調査では、教科によっては、「学級規模の縮小」よりも「T・T」の方が有効であるとの指摘がある一方で、指導方法が一定する基礎・基本の定着では、「学級規模の縮小」が強く意識される